

コントラスト心エコー検査におけるタスク・シフト/シェアの取り組み

◎楠山 美保¹⁾、杉山 弥生¹⁾、佐野 史江¹⁾、高村 比路華¹⁾、遠藤 彩¹⁾、鈴木 崇浩¹⁾、佐野 りほ¹⁾、杉山 紺菜¹⁾
地方独立行政法人 静岡市立静岡病院¹⁾

【はじめに】

塞栓源不明の脳塞栓症患者に対して、右左シャント検索を行うコントラスト心エコー検査がある。以前は経食道超音波検査にて行われていたが、鎮静下では適切な憤怒負荷がかけられないため、経胸壁超音波での依頼件数が増加している。

法改正により検査技師の業務範囲が拡大した事を機に、この検査のタスク・シフト/シェアに取り組んだため現状を報告する。

【検査実績】

期間：2023年7月13日～2024年5月31日。検査件数：35件（男性25名、女性10名）平均年齢：70.7±13.9歳。

【タスク・シフト/シェアによる効果】

オーダー画面に検査項目を作成することにより多職種間で検査予定が共有できるようになった。またマニュアルを整備したことで、医師の指示忘れを防ぎ的確な検査前準備がされるようになった。慣れない三方活栓の操作に戸惑ったが、約半年間で円滑に行えるようになり、現時点で4

名の技師がこれを担当することが可能である。医師立ち合いのもと技師主体で行うことから始め、2024年4月からは技師のみで実施している。これにより医師の拘束時間はなくなった。

【考察】

外来担当医師が診療を中断し検査を実施する事が多かったが、これが解消された。医師の業務負担軽減に加え、患者サービスの観点からも改善につながったと考える。課題として静脈路確保がある。現状では看護師が行う手順となっているが、確保困難な患者ほどルート内が凝固しやすく静脈路確保をやり直すことがある。検査直前に検査室で静脈路確保を行うことで更にスムーズな検査が実施できる可能性はあるが、検査室のスペース的な問題があり今後の課題である。

近年、脳梗塞予防のための経皮的卵円孔閉鎖術が登場し、検査の機会は益々増加すると予測され、このタスク・シフト/シェアのさらなる効果が期待される。

連絡先 054-253-3125（内線 5310）